しがのふるさと支え合いプロジェクト さとのかぜ通信

Vol.6号
2025.3月

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
2030年に向けて世界が合意した「持続可能な開発目標」です
17 パートナーシップで目標を達成しよう

「在原集落協定」と「龍谷大学農学部食料農業システム学科」の協働活動

在原集落協定と龍谷大学のみなさん

令和６年７月14日、高島市マキノ町在原地区で、龍谷大学の学生11名がじゃがいもの収穫を行いました。じゃがいも作りを通じて、地域貢献やマーケティングについて学ぶ「在原プロジェクト」。同プロジェクトのきっかけを作ったのは、食品流通やマーケティングを専門とする金子先生です。先生の研究テーマに興味のある学生たちが自発的に集まり、活動がスタートしました。

在原集落協定の福井さんは、高齢化や人口減少が進む在原地区と外部をつなぐ形を模索する中で、金子先生と出会ったと話しています。福井さんは学生たちが地区の思いを含めて、在原の農産物のおいしさや在原の魅力を消費者に発信してくれることを期待しています。

金子先生は、「在原地区の人々が長年培ってきた地域に根ざした知識や経験を、ただ受け身で学ぶのではなく、自ら考え行動してほしい。地域における自分たちの役割は何かを考えることが、このプロジェクトの重要な要素だと思っています」と話しています。

令和６年７月18日、龍谷大学内で、在原プロジェクトの学生たちは、収穫したじゃがいもを使った加工品の販売会を実施しました。

メニューは、じゃばらポテト、ポテトチップス、スマイルポテト、そして冷製ポタージュの４種類。学生たちはメニュー表やポスターなども作成し、この販売会を通じて在原地区の魅力を発信しようと意気込んでいました。

11時30分に販売がスタートすると、すぐに多くの学生や教職員が会場に集まりました。特にスマイルポテトやポテトチップスは大人気で、すぐに売り切れるほどの反響ぶり。販売会での目標１００食を見事に達成しました。

「在原プロジェクト」に取り組む学生の寺沢さんは、「限定販売だったが、大反響で驚きました。今後の課題として注文から提供までの流れや導線の改善が必要ですが、在原地区のことを少しでも多くの人に知ってもらえると嬉しいです」と語っていました。

令和６年11月、在原集落協定と龍谷大学農学部食料農業システム学科は、都市農村交流と地域資源の活用に関して、しがのふるさと支え合いプロジェクトの協定を締結しました。

学生たちが食の生産から加工・販売の一連の過程を学び、地区の魅力を発信するこの取り組みが、在原地区の活性化につながることが期待されます。

じゃがいも加工品の販売会

「一般社団法人ゆずのだいどころ」と「滋賀県立甲良養護学校」の協働活動

甲良養護学校は、一般社団法人「ゆずのだいどころ」と令和５年度に「しがのふるさと支え合いプロジェクト」の協定を締結。協定締結前から長年続いてきた両者のつながりを深め、長寺地域の活性化と豊かな学びに向けてより前進していくこととなりました。

令和６年11月26日、甲良町の長寺ゆず公園にて滋賀県立甲良養護学校高等部生徒によるゆずの収穫体験が実施されました。甲良養護学校の中村敦夫校長や生徒代表のあいさつから始まり、その後はゆず園の管理をしている大野均さんからゆず公園の成り立ちや収穫における注意事項の説明を受けました。この日は農業を学ぶ生徒13名が参加し、ゆずの木にあるとげに気をつけながら丁寧に収穫していました。「普段の学校生活も楽しいけど、このような作業学習もとてもおもしろい。慣れてくるとどんどん作業を進められた。」と生徒のみなさんは生き生きとお話してくれました。

生徒たちによるゆずの収穫の様子

ゆずのだいどころ代表の上田常雄さんは「生徒たちがみんな真面目で楽しそうに作業してくれていることが何よりもうれしい。ゆず農園に生産以上の価値が生まれていると感じる。」と笑顔でお話してくれました。収穫したゆずは食品加工の授業で活用するほか、給食でも振る舞われるとのことです。

12月には彦根市のスーパーマーケット「パリヤ サンペデック」にて、ゆずのだいどころと養護学校の生徒と協働でのゆず商品の販売会が実施されます。中村校長は「生徒たちに社会の場で経験を積む機会をもらえて大変ありがたい。」と意欲的に語ってくれました。

ゆずを通じたつながりから、地域の活性化や生徒たちの成長が育まれていることを感じる１日でした。

ゆずのだいどころと甲良養護学校のみなさん

「しがのふるさと支え合いプロジェクト」は、滋賀県の農山村の活性化や新たな価値の創造を目的に、集落等と企業や大学等が協働活動を行うプロジェクトです。今このプロジェクトをきっかけに農山村と都市の間に新たな風が吹き始めています。通信ではこれらの新しい風をお届けします。

HPはこちら　Facebookはこちら

「今郷棚田集落協定」と「立命館大学ＢＫＣ社系研究機構」の協働活動

令和６年10月５日に、甲賀市の岩上コミュニティセンターにて、今郷棚田集落協定のメンバーと立命館大学の吉積教授と高田教授のゼミ生とが、水口かんぴょうを使ったレシピ集作成のための試作と、棚田米のパッケージデザインの検討を行いました。

立命館大学は、令和４年度に「しがのふるさと応援隊」のフィールドワークで今郷棚田集落協定とつながりを持ち、令和６年度には「しがのふるさと支え合いプロジェクト」として、棚田米パッケージデザインや都市農村交流を通じた地域の活性化と学生の学びを深めていくことで協定を締結し、先述のゼミ生で「チーム今郷」を結成しています。

今郷棚田集落協定と立命館大学のみなさん

立命館大学食マネジメント学部、吉積ゼミ・高田ゼミによるかんぴょう干し体験

令和６年７月27日に、ＪＡこうかの協力のもと、伝統野菜である水口かんぴょうの収穫とかんぴょうを薄くむいて干す加工を体験するとともに、棚田保全活動に向けた今郷棚田集落協定の取組について講和を聞いた学生たち。10月５日には、学生たちは今郷棚田で生産された５品種のお米を食べ比べたあと、２グループに分かれて、５品種の食べ比べができる商品を想定して、米を詰める袋や容器、外箱の形状、キャッチフレーズについて話し合い、グループ発表しました。

今郷棚田集落協定の福野（ふくの）代表は、「大学とのつながりを得て地域活性化の輪が広がっていることがうれしい。若者の感性を生かしたパッケージデザインに期待している。」と話してくれました。

学生が５品種のお米を食べ比べ

竹のうつわにご飯を盛り付け

チーム今郷の学生と今郷棚田集落協定は、令和７年１月からは棚田米詰め合わせセットの外箱などのデザインに取り掛かり、令和７年産のお米の販売でのパッケージのお披露目を目指しています。

「ＲＩＣＥ ＩＳ ＣＯＭＥＤＹ®」と「株式会社エイチ・アイ・エス」の協働活動

稲刈り体験ツアー参加者で稲刈り

ＲＩＣＥ ＩＳ ＣＯＭＥＤＹ®は、長浜市西浅井町庄を拠点に、農業のイメージをポジティブに変えようと、市街地などで釜炊きの炊飯をしてふるまう「ゲリラ炊飯」の活動や、ＳＮＳでの動画により農村の魅力を発信している団体です。また、同団体のメンバーは、庄地域で稲作をしていることから、田植えや稲刈りなどの農業体験を都市住民に提供し、関係人口の拡大にも取り組んでいます。

株式会社エイチ・アイ・エスは農村の魅力を体感できる旅行を企画するなかで、ＲＩＣＥ ＩＳ ＣＯＭＥＤＹの活動を知り、農村体験ツアーでの連携を図っていくことで、令和６年度に協定を締結しました。令和６年９月15日、長浜市西浅井町庄にて、稲刈り体験ツアーが開催されました。稲刈り体験の田んぼでは、子どもから大人まで幅広い年代の参加者が、鎌で次々と稲を刈り取っていきました。参加者の中には、５月に行われた田植え体験への参加者もおられ、「田植え体験したときには、小さい苗だったのに、こんなに実っていてうれしい。」とお話してくれました。稲刈りのあとは、地域の建物に移動し、新米２品種を食べ比べました。ご飯を炊き上げた羽釜の蓋を、「パッカーン！」の掛け声とともに開けると、立ち上る湯気とつやつやのご飯を目にして、参加者からは「おいしそう！」と歓声が上がりました。ＲＩＣＥ ＩＳ ＣＯＭＥＤＹの中筋さんから、参加者ひとりひとりにおにぎりを手渡し、試食したあとは感想を聞き取っていました。ある参加者に伺うと、「大阪の市街地在住で初めて稲刈りした。農村での体験は新鮮な気持ちがする。ご飯ももっちりして、とても美味しかった。」とお話してくれました。ＲＩＣＥ ＩＳ ＣＯＭＥＤＹと株式会社エイチ・アイ・エスでは今後も連携して、体験ツアー等を通じた都市住民への農村の魅力発信に取り組んでいきます。

RICE IS COMEDY の中筋さん

【事業実施主体】滋賀県農政水産部農村振興課
〒520-8577　滋賀県大津市京町４丁目１番１号
TEL：077-528-3963

【運営事務局】株式会社パソナ農援隊
〒530-0001　大阪府大阪市北区梅田 1-10-1 梅田 DT タワー B1
TEL：06-7636-6124（9:00～17:30）